

宮城県

復興する被災地ホール

特需に陰り 正念場へ

3月11日に発生した東日本大震災から8カ月が経過した。宮城県では、震災で半壊以下の損害を受けたホールはすべて営業を再開。全壊のホールも25店舗中5店舗が再開にこぎつけ、ホール軒数は震災前とほぼ同数にまで回復した。震災

後は、被災者や被災地支援に訪れた建設関係者やボランティアが詰めかけたことなどで被災地のホールでは高稼働の営業が続いていたが、10月以降、特需に陰りが見えてきた。被災者の環境変化など新たな課題も浮かび上がっている。

宮城県内のホールは210店舗中208店舗が震災の被害を受け、25店舗が全壊。183店舗が半壊もしくはそれ以下の被害を受けた。4月15日、仙台市から北東へ約30キロメートルにある石巻

市では震災で死者3180人、行方不明者688人が全壊家屋は2万軒を超えた。ホールも甚大な被害を受け、10店舗が全壊、18店舗が半壊もしくはそれ以下の損傷。4月未までに営業再開できた市内のホールは28店舗

中3店舗しかなかった。市では震災で死者3180人、行方不明者688人が全壊家屋は2万軒を超えた。ホールも甚大な被害を受け、10店舗が全壊、18店舗が半壊もしくはそれ以下の損傷。4月未までに営業再開できた市内のホールは28店舗

ともあった。石巻市からさらに北へ40キロメートル。岩手県と隣接する気仙沼市は、津波によって市街地の8割が被害を受け、地元住民の多くは仮設住宅や県外に移り住んだ。特に基幹産業である水産加工の工場が壊滅的なダメージを受け、未だに復興の目途は立っていない。市内にあった11店舗のホールのうち、震災直後に営業が再開できたのは4店舗。数少ないホールに被災者が集中した。

立ち見が出るほど賑わう店内。震災発生直後は廃業を覚悟したというホールもあったというが、被災店舗も徐々に営業を再開。お盆までに気仙沼市内で営業するホールは8店舗に増えた。DKS1Sデュータを見ると、8月の全国平均のパチンコ稼働は2万3350個、パチスロ稼働は

1万614枚、東北地区平均のパチンコ稼働は2万6570個、パチスロ稼働は1万1540枚と、どちらも全国平均を上回った。営業しているホールにファンが集中したほか、多くの建設作業員やボランティアが現地入りしたことで、特需はあったようだ。特に4円パチンコは震災前の稼働を上回り、好調に推移した。宮城県内では8店舗を展開する(株)マルタマ(本社/仙台市)の「まるたま」石巻店は、石巻市内で4月中に営業再開にこぎつけた。児玉朗店長は「避難所暮らしの被災者は生活必需品や食料が無料で手に入るの、生活費は必要ない。アパート暮らしだった人や一人暮らしの人は、ある程度給付金を自由に使えるため、4円パチンコを打っているのはないか」という。

宮城県を中心に13店舗を展開し、気仙沼市で2店舗を経営するセントラル伸光(本社/仙台市)の服部悦郎部長は「給付金で高級車やブランド品を購入するという報道もあった。同じような理由でパチンコファンも高射幸性の4円パチンコを遊技するのではないか」と推測する。

実際、石巻市のホール関係者は「避難所ですら被災者が「まだ義援金が残っているからパチンコを打てる」と話すのを耳にしたと打ち明ける。

高額品を購入した人やパチンコへの投資を増やした被災者がいることは事実だが、その背景は、大きなストレスを抱えた被災者が身を丈を越えた消費によって「気晴らし」をしている可能性がある。リカバリーサポーター



水産加工の工場は被災時のままの姿
沿岸部には未だにガレキが広がっている

平均のパチンコ稼働は2万6570個、パチスロ稼働は1万1540枚と、どちらも全国平均を上回った。営業しているホールにファンが集中したほか、多くの建設作業員やボランティアが現地入りしたことで、特需はあったようだ。特に4円パチンコは震災前の稼働を上回り、好調に推移した。宮城県内では8店舗を展開する(株)マルタマ(本社/仙台市)の「まるたま」石巻店は、石巻市内で4月中に営業再開にこぎつけた。児玉朗店長は「避難所暮らしの被災者は生活必需品や食料が無料で手に入るの、生活費は必要ない。アパート暮らしだった人や一人暮らしの人は、ある程度給付金を自由に使えるため、4円パチンコを打っているのはないか」という。

宮城県を中心に13店舗を展開し、気仙沼市で2店舗を経営するセントラル伸光(本社/仙台市)の服部悦郎部長は「給付金で高級車やブランド品を購入するという報道もあった。同じような理由でパチンコファンも高射幸性の4円パチンコを遊技するのではないか」と推測する。

実際、石巻市のホール関係者は「避難所ですら被災者が「まだ義援金が残っているからパチンコを打てる」と話すのを耳にしたと打ち明ける。

高額品を購入した人やパチンコへの投資を増やした被災者がいることは事実だが、その背景は、大きなストレスを抱えた被災者が身を丈を越えた消費によって「気晴らし」をしている可能性がある。リカバリーサポーター

高額品を購入した人やパチンコへの投資を増やした被災者がいることは事実だが、その背景は、大きなストレスを抱えた被災者が身を丈を越えた消費によって「気晴らし」をしている可能性がある。リカバリーサポーター

新規客「増えたわけではない」

セントラル伸光が経営する気仙沼市内のホールは震災の被害が大きく、競合店から大きく遅れて営業を再開。低玉貸し専門店「気仙沼セントラル鹿折」(パチンコ210台、パチスロ41台)を7月に通常貸し玉専門店「気仙沼セントラル神山」(パチンコ235台、パチスロ73台)を8月にオープン。この時点で気仙沼市内のホールは8店舗までに増えたが、「神山」は震災前の稼働を上回った。同社の服部悦郎部長は「お盆や正月のように、ファンが一時的に集中して来店しただけ。新規のお客様が増えたわけではない」と分析する。



50銭より、今は4円パチンコ

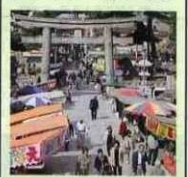
震災後の営業再開に合わせ、少ない金額で長く遊んでもらおうと50銭パチンコを32台導入。11月10日には1円パチンコを増やした。児玉朗店長は「石巻市はもともとパチンコ以外の娯楽が少ない地域。避難所暮らしで暇を持て余した人やストレスをため込んだ被災者の方が詰めかけた。震災で亡くなられた方の中には、パチンコファンの方もいただろうが、店舗数の減少によって震災前よりも稼働は上がった」という。50銭パチンコは当初、多くの被災者が遊技したが、次第に稼働が低下し、現在は4円パチンコの稼働を下回るようになった。



トネットワーク代表で精神科医の西村直之氏は震災直後から「被災直後は一種の興奮状態だがひと段落したところで不安や心配によるメンタルの問題や過労がじわじわと問題化するの適切なケアが長期必要」と指摘してきた。不安な精神状態から過度にパチンコ・パチスロにのめり込むことがないよう被災地ホールには顧客への細かいケアも求められる。

被災地では年内は高稼働が続くと見られているが、すでに夏場に比べれば稼働は低下している。復興支援のボランティアや建築関係者が減ってきたことや、営業を再開するホールが増えてゴザイが分散したことで被災者がパチンコを遊技する資金がなくなってきたことなどが要因と考えられる。気仙沼のホール関係者は「一時期のピークは過ぎた。広告・宣伝規制の運用方針見直しもあって販促物での差別化も少なくなっている。今になって投資をしてまで営業を再開しなければよかったと思っているオーナーもいるのでは」と推測する。義援金の支給がすでに終わった地域もある。雇用保険は10月から90日間延長されたが、その先は不透明だ。いずれは動かざるを得ない状況だが、沿岸部の基幹産業である水産業は壊滅的なダメージを受けたまま。収入もなくパチンコどころではない被災者が増える可能性もある。被災地のホールは、新たな正念場を迎えようとしている。

いつの時代も愛される 大衆娯楽



パチンコパチスロ

株式会社アミューズメントプレスジャパン